

2週間前、大齋節が始まった最初の日曜日に、私はこの大齋節が、最初はその年のイースターに洗礼を受ける人のために設けられた季節だ、と申しました。そして、今日の福音書は、洗礼の意味を学ぶために、大変ふさわしい箇所が選ばれている、と思います。

今日の福音書は、ヨハネによる福音書の4章5節からになっています。しかし、1節から4節までも、大切な箇所なので、ちょっと読んでみます。

◆イエスとサマリアの女

1:さて、イエスがヨハネよりも多くの弟子をつくり、洗礼を授けておられるということが、ファリサイ派の人々の耳に入った。イエスはそれを知ると、2:——洗礼を授けていたのは、イエス御自身ではなく、弟子たちである—— 3:ユダヤを去り、再びガリラヤへ行かれた。 4:しかし、サマリアを通らねばならなかった。

イエス様が洗礼を授けていたという噂が原因で、都のエルサレム周辺で活動できなくなって、当初の活動の拠点であるガリラヤに退かなければならなかったことがわかります。しかし、それよりも大切なことは、「サマリアを通らねばならなかった。」という言葉です。

サマリアがどんな所か、皆さんはよくご存知でしょう。場所はユダヤとガリラヤの間に挟まった土地ですが、イエス様が生まれるより700年以上前、この土地に住んでいたイスラエル人は、アッシリアという国に滅ぼされて、外国人との間に民族が混ざり、それまでの聖書の信仰を捨てた、とユダヤ人たちは、このサマリア地方の人々を軽蔑していたのです。

それで、ユダヤからガリラヤに旅をする場合は、サマリアを通過するのが一番の近道でしたが、それを避けて、一旦ヨルダン川の東側に出て、そこを北上し、再びヨルダン川を渡って、ガリラヤに行く、という、迂回路をとっていたのです。

ところが、このたび、イエス様は、通常ユダヤ人が通る道ではなく、ユダヤ人が嫌うサマリアを通ることになったのです。

「しかし、サマリアを通らねばならなかった。」

どうして、このような表現になったのか、いくつかの可能性が考えられます。

通常の迂回する道を通ると、イエス様にとっては都合の悪いことがあったのではないかと。

ある本には、こんなことが書かれていました。

通常の迂回する道では、『行く手には、師匠同士の気持ちとは裏腹にイエス様一向に必ずしも好感を持っていないらしいヨハネの弟子たちがいた。後ろからは、お宮で大暴れした（ヨハネ2章で宮清めをされたこと）ためにお尋ねものとなったイエス様を捕えようと大祭司一党とファリサイ派の手のものが追跡してくる。このまま進めば、前後に敵を受けて挟み撃ちになる危険があった。』と説明しています。

しかし、あるいは、積極的に、人々の嫌うサマリアに、どうしても行かなければならない目的があったのかもしれませんが。

今日の福音書に出てくる、サマリアの女の人との出会いが、偶然ではなく、イエス様が望んで、この女の人に声をかけなければならなかった、と考えるなら、この出会いから、私たちは、イエス様がこの世に来られたことの意味、また洗礼の意義を、豊かに学ぶことができるのではないかと、思います。

先週の福音書の最後に「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」という言葉で結ばれていることを私は関連して考えるのです。

今日の聖書の場面を想像すると、イエス様は旅に疲れて、井戸のそばに座っておられます。時刻は正午頃。太陽が真上から照らす、暑い時間です。この場面で、サマリアの女が現れ、弟子たちはそこから町へ出てゆくことが語られています。

『7:サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。 8:弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。』

井戸に水を汲みにくるのは、当たり前。昼に食べる物を手に入れるのも当然のこと、と考えてはいけません。そして、イエス様が女性に声をかけることも、すべて、普通ではない行動なのです。

まず、水を汲む、というのは大変な重労働で、それをわざわざ真昼にやるのはおかしい。普通、水汲みは、涼しい朝か夕方仕事なのです。ところが、この女性は町の人々に顔を合わせたくなかった。暑い真昼に体力的に苦しくても、人々と顔を合わせて、精神的に苦しむより増しだと考えていたのでしょう。

それは、イエス様との会話で明らかになります。彼女は、5人の男と次々結婚しては離婚するということを繰り返し、現在は6人目の男と同棲中だったのです。サマリア人は、モーセ五書という旧約の最初の5つの書物だけを聖典にしていますが、やはり厳格な倫理観を持っているので、このような女性は、人々から軽蔑されていたと思われます。

さて、そんな女性に対して、イエス様は「水を飲ませてください」と頼むのです。同じ民族であっても、男性が公然と女性と話をするのは、やるべきことではない、と考えられている社会で、違う民族、それも軽蔑している民族の女性に声をかける、というのは、異常なことです。この女性も、それに驚いて、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか。」と驚いて質問しています。

ここには、民族と男女の違い、それに加えて、この女性は普段から人々に白い眼で見られている、ということになると、イエス様が声をかける、というのは、大変な壁を乗り越えての行為だと推測されます。

さて、そのイエス様は、自分の弟子たちにも、異常なことをさせます。「弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。」ということです。

普段から軽蔑しているサマリアの町に、弟子たちに買い物に行かせるのです。弟子たちは、「困ったことをさせられるなあ。嫌だなあ。」などと思ったでしょうが、「先生も疲れているんだから、何か手に入れなければ」という思いで、サマリアの人々から、どんな嫌がらせなどの目にあっても、食べ物を手に入れようと、出て行ったことでしょう。

自ら、サマリアの女の人との関わりを持とうとしたイエス様は、弟子たちにも、民族の壁を越える実習をさせた、ということではないか、と思います。

さてその実習は、イエス様が、サマリアの女の人に「水を飲ませてください」という言葉から話が始まりましたが、話は展開して、逆に女の人の方が、「主よ、渴くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」と頼みます。最初は会話の中での冗談のような話の掛け合いみたいでしたが、イエス様は、『わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。』とされているのです。

これは、最初に言いましたように、洗礼の話なんです。ここでは具体的に彼女に水をかけているわけはありませんが、それによって『生まれ変わらなさい』と勧めておられると受け取れるでしょう。

私は、今日の福音書で、イエス様と出会ったサマリアの女性が、社会の人々の目を避けて生活していたのが、イエス様との出会いによって、堂々とイエス様との出会いを、町の人々に証言する者になったことに注目します。

クリスチャンになる、ということは、私たちが、それぞれに持っている先入観、偏見などいろんなものを捨てて、神様の子どもであることに気づき、歩んでゆくことだろうと思うようになりました。

私たちがサマリアの女の人のように、豊かな神様の恵みを、毎日豊かに汲んで飲む者でありたいと思います。